

ふたば在宅クリニック

医療法人社団 爽緑会

医師が力を発揮できる環境を整備し、新たな在宅医療のモデルケース構築を目指す

JR上野東京ラインや湘南新宿ラインで「東京駅」「新宿駅」などの都心主要部と直結した埼玉県北東部にある「久喜駅」。その駅前にあるのが医療法人社団 爽緑会 ふたば在宅クリニックだ。医療資源が少ないといわれる地域にあって、より求められる在宅医療の形を追求する同クリニックの理事長である石井成伸氏に、医師の新たな挑戦のフィールドについて取材した。



理事長
石井 成伸氏

◎2008年／聖マリアンナ医科大学卒業、東京女子医科大学病院初期臨床研修医
◎2010年／東京女子医科大学病院第一内科
◎2012年／埼玉県社会福祉法人恩賜財団済生会支部内科
◎2017年／ふたば在宅クリニック開設
◎2018年／医療法人社団爽緑会 ふたば在宅クリニック開設
■認定医・専門医／○日本呼吸器学会認定 呼吸器専門医 ○日本内科学会認定 内科認定医 ○がん緩和ケア研修会修了医 ○認知症サポート医
○難病指定医 ○臨床研修医指導医

こに任せれば大丈夫」と信頼される在宅医療を行っているからだと自負しています。提供する医療の質もそうですし、患者さんやご家族が困ったときに、しっかりと、的確に対応できる体制を整えています。信頼関係を構築することで、いざ患者さんに入院が必要となった場合、すぐ受け入れ態勢を取つてもらうことができます」

実は同クリニックには、地域の中核病院の勤務医も非常勤医として在籍してい

久喜駅の駅前広場の一角にある、ふたば在宅クリニック。約20名の看護師、事務スタッフが、医師をサポートしている。院内には医局があり、落ち着いた環境の中で業務を行える。



るため、患者の入退院は、状況に応じて柔軟、かつスマートに行われているといふ石井氏。

「訪問看護ステーションや、介護・福祉関連施設との連携も強化しており、地域全体で患者さんを診る環境を整えていくたいと考えています。まずは質の高い医療を行うことで地域をリードし、久喜モデル」と呼ばれるような地域医療の形を発信していきたいですね」

ゆとりある勤務体制で新たなフィールドに挑戦を

ふたば在宅クリニックは開設から約1年間、医師は石井氏がほぼ1人という状況で運営されていた。同氏はその時の経験から、在宅医療における医師の働く環境の課題解決に取り組んでいる。

「在宅療養支援診療所は24時間365日対応を求められますが、1人の医師がそれに対応することは当然不可能です。そこで当クリニックでは常勤医、非常勤医を含め、ゆとりある勤務体制を整えています。看取りも年間200件に及びます。医師の負担軽減を図り、存分に力が發揮できる環境整備を進めてきました」

同クリニックでは1日に勤務する医師は5名。そのうち4名が在宅医療を担当し、1名は待機する体制となっている。緊急時の対応やフォローの役割を担っているが、その他はカルテの整理や症例の勉強等に時間を充てられる。



石井氏（右）と、ふたば在宅クリニックの事務部門を支える事務長の秋谷智広氏（左）。「勤務条件など、気軽にご相談いただければと思います。診療に同行しての見学なども歓迎です」と語る。

医療法人社団 爽緑会 ふたば在宅クリニック

●募集科目／在宅 ●年収／2,000万円～2,400万円（税込）週5日 ※モデル給与 卒後10年で2,400万円 ※毎月10時間分（1日30分）の残業代を含む。試用期間あり ●業務内容／在宅診療 ●経験／一般的な内科疾患を診ていただければ特に必須スキルはございません。 ●勤務日数／週3日～週5日 ●当直／なし（希望によりオンコール待機あり） ●勤務時間／9:00～18:00 ●休日／土日祝日・年末年始5日・夏期7日・週1～2日研究日あり ●待遇／社会保険完備（医師国保・厚生年金・労災保険・雇用保険）・学会参加費用補助・開業支援プログラムあり ●勤務地／〒346-0016 埼玉県久喜市久喜東1-2-5 東山ビル3F-A ●交通／JR・東武線「久喜駅」東口徒歩30秒

応募・問い合わせ 事務長 秋谷までお気軽にご連絡ください。見学も歓迎です。 〒346-0016 埼玉県久喜市久喜東1-2-5 東山ビル3F-A

E-mail ▶ contact@futabaclinic.jp

H P ● <https://www.futabaclinic.jp/>

TEL ● 0480-44-9178 【事務長／秋谷】



精神科、皮膚科専門医も在籍 スペシャリティを生かした診療

現在、ふたば在宅クリニックでは、心肺、脳神経等の内科疾患、整形疾患、認知症などで通院困難な患者を中心に行っている。また末期がんなど患者の在宅緩和ケアや看取りにも力を入れており、年間の看取り数は200件を超える国内有数の在宅診療所である。

「私自身の専門分野と積み重ねてきた経験に加え、整形外科・リハビリテーションの専門医、さらに循環器専門医が常勤

地域医療においては、在宅医療機関と地域の中核病院との連携が、何よりも重要な要素となっています」

残業はほとんどなく、17時にはその日のカンファレンスを行い、18時前には終了していることが多い。また日中の診療を丁寧に行い、外部の訪問看護ステーションとも情報を共有しておくことで、夜間のオンラインカールも月1回程度の対応となるようしているという。

「在宅医療の分野には、まだ確かな『教科書』はありません。患者さん一人ひとりに対してオーダーメイドの診療を考えていく必要があります。そこには病院勤務では味わえない面白さがあります」と語る石井氏。在宅医療や緩和ケアなどに興味があり、スペシャリティも生かしつつ、地域医療のモデルケースをつくるという新たな取り組みに挑戦したいという意欲のある医師には、腰を落ちつかれて取り組める環境が用意されている。

「まず何より、各病院の医師から『あそ

だ』という。同クリニックでは1日に一度、カンファレンスを行っており、一人ひとりの患者さんを複数の医師により診察することは、在宅医療では難しいのですが、当院ではそれが可能になっています。それは患者さんにとってもちろん、医師にとっても負担を軽減することになりますし、新たな知識を身につけるチャンスにもなると思います」

同クリニックでは1日に一度、カンファレンスを行っており、一人ひとりの患者さんを複数の医師により診察することは、在宅医療では難しいのですが、当院ではそれが可能になっています。それは患者さんにとってもちろん、医師にとっても負担を軽減することになりますし、新たな知識を身につけるチャンスにもなると思います」

医療資源の少ない地域で要の存在となる「動く病院」に

クリニック開設前は、大学病院や地域の基幹病院に勤務し、内科・呼吸器科・救急医療・がん治療・緩和ケアを中心に行ってきた石井氏。そこで見た地域医療の現状に、問題意識を持ったと語る。

「外来は車椅子や杖などで通院していく患者さんが多く、また地域に急性期総合病院の数が少ないので、長期入院も難しくなっています。患者さんと一緒に過ごす時間が長い状況になっていました。患者さんとそ

のご家族はもちろん、医療従事者も『受け皿』を探すこと、精神的、肉体的に疲弊していました」

その状況をなんとか打破し、地域により良い医療を提供していくためには、スマートな医療連携の構築が必要と考えた同氏。病院・外来診療所とは役割の異なる自宅で治療および予防を行う機能を持つた、本格的な在宅医療の必要性を感じたという。

「昨日、在宅医療は少しずつ根付いてはいますが、埼玉県北東部にはまだまだ医療資源自体が足りていないのが現状です。そこで、この地域のほぼ中央に位置する久喜市に、在宅医療を特化したクリニックを開設しました。様々な疾患に悩む患者さんやご家族の受け皿となり、幅広い医療ニーズに応えるための体制の構築を図っています。目指しているのは地域医療の要となる『動く病院』です」

同クリニックでは1日に一度、カンファレンスを行っており、一人ひとりの患者さんに対する学習ができます。それは他の専門医から学ぶこともあり、患者さんに対しても充実した在宅医療を提供できる環境となっています」

「二人の患者さんを、複数の医師により診察することは、在宅医療では難しいのですが、当院ではそれが可能になっています。それは患者さんにとってもちろん、医師にとっても負担を軽減することになりますし、新たな知識を身につけるチャンスにもなると思います」